□　この論考は、『作文と教育』（日本作文の会編集）６・７月号に寄せられたものです。２０２０年７月発行

# そうだ、学校って
## ―新型コロナウィルス禍で考える―

西條　昭男（京都綴方の会）

新型コロナウィルスが世界中に蔓延し未曽有の事態になっている。地球全体を一気に呑み込んで広がるウィルスの脅威。２０２０年、人類はこの危機を乗り越えるために何をなすべきか。

学校休校の措置が取られた。全国の児童、生徒たちは3月から5月6日まで約2ケ月の自宅待機を余儀なくされ、その後多くの学校は5月末日まで延長された。普段なら休日を待ちわびている子どもたちも、ここに至ってうんざりしている。

さて、休校になるということは、どういうことか考えてみた。

第一、子どもたちは友だちと会えないということ。友だちとしゃべりたい、楽しく遊びたい、友だちとの関係性が断ち切られる、子どもにはこれが一番こたえる。友だちと会いたいなと自宅でうずうずしている子どもの様子をみているとよく分かる。そうだ、学校は友だちがいるところなのだ。

第二、勉強がつまらなくなること。自宅で課題学習プリントを一人でやっていてもつまらない。先生や友だちと顔を合わせないでＰＣ通信学習で元気なんか出る？　そうだ、学校は先生と友だちと一緒に学ぶところなのだ。

第三、今まで先生の指示で動いていたけれど、そうだ、自分の頭で考えて何をするか決めて行動するのだ。

第四、給食がないこと。昼食はどうしているの

だろう。共働き家庭は子どもで留守番。弁当を作ってもらって食べている？　自分でカレーをチンする？　菓子パン？　栄養は十分か？　一人では美味くない、みんなといっしょに食べる給食がいいな、体重が減っていないか？　そうだ、学校は給食があるところなのだ。給食は文化だ、健康と体力の源だったのだ。

第五、子どもが学校へ行くから親は安心して仕事も出来た。そうだ、学校は安心安全な所なのだ。

第六、学校に子どもの姿が見えないこと。公園にもいない。地域から子どもの姿と声が消えた。なんと寂しい光景。そうだ、子どもは世界を元気にさせていたのだ。

○

かつて阪神淡路大震災のとき、また東北大震災のとき、先生たちは大事なことに初めて気付いた。学校に子どもが来るということ、それがどんなにかけがえのない価値あることか。

―よくぞ生きていた、

よくぞ学校へ来てくれた。

そして先生たちは語り合ったのだ。

―今まで私たち、学校はこの子どもたちを心から宝のように大切に育ててきたか。

学校とは何か。新型コロナ禍の今、改めて考え問い直すときではないか。